

ン捕虜収容所を脱走して再会できたが、喜びも束の間、国民党に捕まり、使役。その後代わった八路軍から二回出動命令を受け、御主人は担架隊、しげさんは看護隊、こうして勤務中、次男克好さんを出産した。昭和二十四年九月突然引揚げ命令。

しかし引き揚げたが住む家、仕事はなく苦勞したが、ようやく引揚者住宅に入ることができた。御主人は薦職をしていたが、あるとき、三、三〇〇ボルトの高圧線に触れ重態となり、数年間仕事につけない状態、また引き続き交通事故の災難と続いた。だが細工仕事を好む性格から会社から仕入れた材料を家で製作、納入するようになり生活も徐々に安定した。しげさんは根性のある人で、会社に女工として十数年、引き続き十年余り清掃婦として働いた。

昭和四十五年には住宅も新築、苦勞して引き揚げてきた次男克好さんは警察官に採用される。引き揚げ後生まれた長女も嫁ぎ、孫四人もできた。しかし夫與三松さんは終生健康体とは言えず十数年間の入院生活を送り、平成四年（七十歳）で亡くなった。

現在は、幸い健康に恵まれ、次男克好さんは職業柄転勤が多いため、市宮住宅に一人で居住、年金生活をし孫たちの家を訪れたり、元気で楽しい毎日を送っている。

（富山県引揚者団体連合会

会長 砂原 外之）

今も癒えぬ戦争の傷跡

石川県 北崎 可代

大正生まれの私たち世代の多くは、物心ついてからこれと言う楽しい思い出もなく、成長したころは戦争の時代に突入していた。

昭和六年九月十八日の柳条湖事件、また昭和十二年七月七日蘆溝橋事変などあり、国内では失業者が溢れ、農村では次男、三男の耕す土地はなく、生きるために都会に出ても食は得られず生活苦に悩んでいた。その当時、日本政府が積極的に勧めたのが、満州国へ満蒙

開拓団及び滿蒙開拓青少年義勇軍の送出政策であった。満州の地で、食料増産に励むことこそお国のためだと思ひ、多くの人たちが勇躍満州へと旅立った。

昭和十年、十九歳になったばかりの子供のような私は、望まれるままに一度も会ったこともない男性と結婚させられた。金沢市内の中橋町に住み、既製服仕立職人の夫を手伝ひ、翌十一年長男を出産、幼児を背負ひ懸命に働いたが、戦争が激しくなるに従ひ仕事がなくなり、わずか親子三人の生活にも困るようになった。そのころ、町内の男性は次々と召集され、戦地へと出発するのを、私たちは日の丸を振りながら列車を見送った光景は、現在も臉の奥深く残っていて忘れられない悲しい思い出である。

滿蒙開拓団員に応募

昭和十四年二月のある日、夫がいきなり「日本にいても将来が不安だから、俺は満州に行き農業をやる、開拓団員として明日、七尾の徳田訓練所に入って満州に行くから、お前は俺を迎えにくるまで実家で待っていてほしい」と言った。余りにも思いがけない無茶な

言葉に驚いた私は「そんな大事な事をなぜ自分だけで決めて私に言わなかったの。後二カ月で二番目の子供が生まれるのに私はどうするの」「お前に相談しても、どうせ反対するだろうし、俺がいなくても子供は生まれるさ。しばらくの辛抱だ」一度言い出したら絶対自分の思いを通す夫の気性を知る私は、あきらめるより仕方がなかった。

翌日、七尾の訓練所に向かう夫を見送った後、身重な体で長男を連れ、泣きたい思いで実家に身を寄せたが、生活のために働かねばならない。考えた末、娘時代勤めていた漁網会社の工場長に就職を依頼した。子供のときから知り合った人だったので「身重な体で転んだりしたら大変だから、注意して無理をしないように」と特別な配慮で雇ってもらい嬉しかった。子供の母親としてどんな苦勞にも耐えなければとの思いで懸命に働いた。四月十日無事長女を出産した。産後の休養もそこそこに出動し、母子三人の生活のためにと頑張った。

夫に迎えられて満州へ

夫が家族召致にきたのが十月、一家四人が満州に向かつて金沢を後にしたのは、昭和十四年十二月十四日、私が二十二歳のときだった。

極寒の北満に行くのに、綿の入った着物一枚もない娘の貧しい姿を見送る母は、ホームの柱の陰で涙を流していた。悲しそうな母の面影が忘れられない。福井県の敦賀港から朝鮮の清津港までの船旅は、波が高く揺れるので苦しい一時であった。

夜中清津を出発、図們から延吉↓敦化↓蛟河↓拉法↓舒蘭↓沙河子↓山河屯で下車したのが夕暮れだった。開拓団の出張所で一泊、翌日朝食後馬車に乗せられて、一望千里の銀世界を眺めながら石川県加賀地方出身者の入植地加賀村に向かって走った。

二時間くらい走っただろうか。夫が「ほら、部落が見えてきたよ。もうすぐ着くよ」夫の指差す遠くに軒々と五軒の家が見えてきた。「あれが石川村先遣隊の人たちが住んでいる家で、あの後ろに見える建物が俺たちの入る家なんだ」と教えてくれた。

開拓村での生活

加賀村に移住した家族は十二家族、一族に六畳くらいの一部屋が与えられ、床はオンドル式で暖房になっているので、室内では特に寒くはないが、一步戸外に出ると身を切られるような痛みを感じる寒さであった。食事は当番制で、二人ずつ組になって食事を作った。配給された米はなぜか強い石油のおいで、食べるのに大変苦労した。一日三食、毎日毎日貯蔵されている白菜と大根の味噌汁だけのお菜で冬を過ごした。

大変な苦労をした、長い冬から徐々に春の気配が感じられるようになり、農耕作業も近くなったころ、三百人もの団員に配分する農地が、足りないことが分かり、本部役員の中で争いが発生していることを聞いたが、加賀村では討議の末、希望者を募り、遠く離れた静岡村の近くの土地を与えられ、五家族が引越すことになった。

現地は静岡県から入植した人たちが、農業をする自信を失い退団し去った跡地で、柱と棟木だけが残された小屋の周りを、高粱穀で囲い屋根は羊草でふき、各

自の持つ荷物で仕切り、五つの部屋を作り雑居生活が始まった。この引越しも事前に全然知らされず夫の一存で希望した結果、野宿同然な生活を余儀なくされ、大急ぎで農作業が始められた。河北村と名付けられ、共同作業で乳幼児がいても作業を休むことは許されない。長男の手を引き、長女を背負い種蒔き、除草作業にも従事した。

秋の収穫を終え、冬に備えて各自の住む家を建て終わったときは、既に十一月も半ばを過ぎ、寒さに震えながら家の周りの壁塗りをし、個人家屋に移り入植一年にしてようやく共同生活は終わった。

春を迎えて個人経営になり、我が家に与えられた土地は河北村から遠く離れた静岡先遣隊村の近くで、子供二人を連れて毎日往復するだけでも大変だった。長男は、時々歩くのを嫌がり座り込んで泣いた。長女を背負い遠い道のりを歩き畑に到着すると、木陰に麻袋を敷き長女を座らせたり寝かせたりして長男に見張らせ、私は馬の轡くまを手に畑の畝作りを始める。

種蒔き、除草、刈取り、脱穀と収穫を終えるまで夫

と二人懸命に働いたが、子供たちにまでつらい思いをさせた。夫も気にしていたらしく、翌年の農耕に備えて、農地の入口に六畳二つぐらいの小さな小屋を建てた。器用な夫は大工仕事も上手で、二人の満州人を雇い手伝ってもらい仕上げた。広野の中に建てられた一軒家に親子四人が住むようになった。昼は広々としたさわやかさの中で働くのが楽しく、馬や牛、その他多くの家畜の飼育も苦にならなかったが、引越してしばらくすると、夜更けに狼の吠える声が聞こえるだけでなく、時々窓の下や馬小屋に近づき、驚いた馬が足を蹴上げて威嚇する声に恐ろしさと不安で安眠できず、夜通しランプの灯をつけたまま朝を迎えたこともあった。

年を経るに従って、夫は農業だけでなく山林の伐採にも関わり、冬期は薪の運搬などで多くの満州人を雇い、私一人では彼らの食事作りも大変になり、一人の老人を炊事係として雇った。その上、近くに住む河次カハツ海ウミ（満人）に裏の畑に家を建てさせ、豆腐を作り売り出したので、ますます人の出入りが多く賑やかになっ

た。このころは、次男も生まれていたので三人の子供と共に家畜の世話など、目の回るような多忙な日々も若さで耐えられたと思う。

夫の応召、最後の別れ

昭和二十年五月十日、夫に召集令状が届いた。第二国民補充兵である。十七日が入隊日であった。そのころは、開拓団の男性は老人、病弱者を除きほとんど召集され、田畑を守るのが大変だった。夫の入隊先は牡丹江省綏陽県綏西第一二四師団輜重隊第三中隊で、入隊までのわずかな日々を夫においしい物を食べさせ、悔いのない出発を見送りたいと思い、遠い山河屯まで他人に頼んで魚を買ってきてもらい、いろいろ料理して食べてもらった。夫も喜んで「おいしい、おいしい」と言っておくれてくれた。でも私たち二人の心の中は寂しかった。

満州に入植してから次男、三男と生まれたが、このとき四人の子供たちが麻疹はしかにかかり病床にいた。長男だけが少し良くなり、玄関まで出て「お父さんさようなら」と一言別れの言葉で父を見送った。あの当時は、

戦地に向かう人たちを見送るのを他人の分からぬようにとされていた。満州に住む日本人だからであろう。

寂しそうな面持ちで出発する夫に一言「体に注意して元気でいてね」胸一杯の思いも言葉にならない。無言で去って行く夫の後ろ姿を見送ったあのときの悲しみ、寂し気な夫の面影は五十一年経った現在も忘れられない。夫は三十五歳、私は二十八歳のこれが夫婦最後の別れでした。

泣きたいほどに悲しくつらい思いを胸に秘めながら、お国のために耐えることこそ大和撫子、立派な日本女性であると教育された私は、人間として素直な思いすら表現できなかった哀れな女であった。

三男の死、敗戦

夫が家を去ってから五日後、三男の禎まことがわずか一歳六カ月で死んだ。我が子を亡くした悲しみを癒すまもなく、昭和二十年八月十五日開拓団本部からの通知を受けて、近くの山林で婦女子の疎開について会議が開かれた。

当時、燃料不足に備えて開発された採取地サンイジバ（三人班

児^こを予定地として討議されたが、遠い山中に行くことに不安を感じ、住み慣れた土地で暮らすことに全員納得の上で決定した。「しかし万一、現住民の襲撃でも受けた場合に備えて集団で暮らす方が力強いのでは」との提案で一軒の家に二家族住むこととなり、私は近くの静岡二区の杉本さん宅に同居することになった。早速引越準備を始めた。幼い三人の子を連れ、いつものような事態になるかも知れぬ不安が募るばかり、金目の物は二頭の馬、豚、鶏、荷馬車などすぐに金に替えられるものは何もない。なんの未練もなく、すべてを裏に住む河次海^{カキウカイ}に託して処分を頼んだ。子供たちには手製のリュックサックの中にそれぞれの着替えを入れて背負わせ、布団だけは河次海に頼んで運んでもらった。

引越しが終わったのが十六日の午後、その晩杉本さん宅で夕食を終えた直後、会議が召集され、望月さん宅に集合した。私たちに日本の無条件降伏が知らされた。今後の注意事項として、

一、不測の事態に備え食料の確保に留意

二、冬の衣類は売らないこと

三、できるだけ換金して現金を準備すること

四、日本人として統一行動をとること

様々な注意事項を教えられたが、これからの生活が不安で気持ちが動揺し、月明かりの道を歩きながら涙がにじんできた。杉本さんと二人で家に帰ると、子供たちは自分たちで布団を敷いて横になっていた。静かな夜だった。様々な思いでなかなか寝つかれない。

玄関の戸が開いたような気配に思わず体を起こしかけたとき、バタバタと数人の満州人が侵入してきた。反抗すると間もなく杉本さんと私の二人は後ろ手に縛られ、俯せにされ上から布団を掛けられた。身をよじり気付かれぬように頭をもたげ布団の隙間から様子を探ると、子供たちは三人共大きな目をあけて枕許でバタバタと家中のものを略奪している満州人の動きを見ている。私は心の中で「忠夫、美智子、義夫恐くても我慢して泣かないでね」と祈り続けていた。やがて略奪を終えた彼らは私たち二人の縄を解きながら「日本は戦争に負けたのだ。お前たちはもうここには住むこ

とは許さない、明日の朝、俺たちはまたくるから、それまでどこかに行け」と言うど帰って行った。

杉本さんが泣き出した。「北崎さん、私たちはこれからどうなるのでしょうか。どうして生きて行くの」私も自身も恐怖と緊張で心臓の動悸が激しく、冷たい汗がにじんでいた。「心配してもしようがないよね。頑張らしましょう」自分でも何を言っているのか分からない。ほかの人たちのことが気になり立ち上がろうとしたが、足が思うように動かない。そのうちに徐々に夜が明け始め、ふらふらしながらなんとか歩いて、薄明かりの戸外に出た。初秋の朝さわやかな空気に触れ、元気を取り戻した思いで、隣の玄関の戸をたたいた。

河北村の高村とめさんが顔を出した。「アッ、貴女たち大丈夫だったのね。良かった」とつぶやきながらこの事件を報告するために、男性二人が泊まっている望月さん宅へと急いだ。一部始終を話したとき、「北崎さんも案外弱いね。そのときなぜ銃を撃ってしらせなかったのかね。何を取られたか調べて報告書を出しなさい。犯人逮捕に必要ですから」あのとき、私

には銃を放つ余裕などなかった。もしできたとしてもどんな結果になったか明らかである。日本人の生存すら案じられる現状では犯人逮捕などむなししい。日本人の強がりとしか思えず、悲しい気持ちで子供の待つ家に帰った。

引揚げ命令

忌まわしい昨夜の出来事が信じられないぐらい、明るい太陽が大地を照らしている。午前十時ごろ、本部より緊急連絡が届いた。

一、内地に引揚げるので午後二時までに本部に集合すること。

二、食糧不足が予想されるので干飯を作り、子供たちのために砂糖を携帯すること。

三、子連れの人は他人に迷惑をかけないために荷物は身の回り品に限ること。

四、降伏を表示するため、国防色の服や布地はすべて焼却すること。処置を怠り危険な状態が発生しても責任は持てぬので厳守すること。

いくら荷物を制限されても寒さに向かう不安がある。

どの家にも二人や三人の子供がいる。子連れの女たち
に荷物の携帯を許さぬことは死を意味する。村中が大
変な混乱状態になった。

そのころから、家々の周りに多くの満州人が日本人
の動きを見つめるように立ち始め、異常な状態になっ
てきた。敗戦直前、男性が「根こそぎ動員」された後、
なぜか本部より婦人警備隊長を命じられていた私は、
子供たちにお握りを作って食べさせようと思いついた。
ふだんは、大豆や南瓜を混ぜ御飯を食べて白米を節約
していたので、せめて子供たちだけでも白い御飯を食
べさせてやりたかった。早速家々から米を集めて大釜
いっぱい飯を炊いてお握りを作り始めたが、戸外に立
つ人がだんだん増え気味悪い状況である。

逃避行

私が引越すとき、すべての家財を託した河次海と
顔見知りの満州人三人が私を呼びにきた。何事かと外
に出た私に彼らは口をそろえて言った。「日本人と一
緒に行ったらだめだ。山河屯ではソ連兵が日本人の女
性を連行し、子供は皆殺されている。私たちを信じて

隠れなさい。貴女だけは死なせたくない」真剣な態度
で話しかける。彼らに有り難うと一言お礼を言って帰っ
てもらったが、二度も三度も説得にきた。「子供が殺
される」この言葉に、私は正直いって心が動揺した。
子供たちは戸外で遊んでいる。顔色を変えて動き回る
母親たちの姿にも、不気味な人たちに囲まれた怖さも
感じていないのであろうか？

私は長男に問いかけた。「ボク、河次海が助けてや
るからここにいるように言ってきたけど、どうしたら
いいと思う？」「お母ちゃんの思うようにしたらいい
よ。僕らお母ちゃんの行くところへ行くよ」不思議な
ほどはつきりした息子の態度に、動揺した自分が恥ず
かしいと思った。例え母子が万一助かったとしても、
日本の国があってこそ生きる権利が保証されるのであ
る。前途に死があるとしても、最後まで日本人として
恥ずかしくないように、共に行動しようとした。
炊き上がった御飯でお握りを作り、子供たち一人一
人に与えると嬉しそうに食べる無邪気な笑顔を眺め涙
がにじんできた。最後に残った三つのお握りを手に、

我が子に食べさせようと外に出たが、先刻までいた子供の姿が見えない。あちこち探したがいない。本部集台の時間が迫っている。ひょっとして昨日までいた家に行ったのか？切羽詰まった思いでお握りを手にしたまま家の方に走った。二十メートルほど下った所に小さな川が流れ細い丸木橋が架けられている。その橋が見える所まで行ったとき、五、六人の満州人に背負われたり、手を引かれて歩く三人の子供の姿が見えた。私は思わず大声で叫んだ。「不行、不信我的小孩返して。僕こっちへおいで本部に行くのよ」頼みの息子は、振り返りながら戻ってこない。やがて彼らは川を越え叢に隠れた。大きな蓬の茂みの中、大人でも入って座れば外からは見えない。ふうふう言いながら追いかけて立ち止まった私の手をつかんで茂みの中に引き入れた。私を囲んでまた説得が始まった。思考力を失った脳裏にはただ子供だけは死なせたくないとの思いだけが堂々巡りをし、涙のでない嗚咽が喉をつき上げた。夢遊病者のような私は言われるままに、草むらを出て我が家を右に眺めながら子供と共に、後ろの山へと登って途

中で休んでいた。そのとき後方で馬の蹄の音がして、「お前たち北崎太太と子供を見なかったか？」「知りません」と応答する満州人の声も聞こえてくる。咄嗟に立ち上がろうとした私を河次海が「不行、不行」と言って座らせた。「今行かなかったら私は非国民になる。

自分だけ生き残っても駄目だ」と心の中で叫んだ。本部の医局に住んでいる母や兄嫁、甥姪たちが心配になる。忍び泣く私を不安そうに見る子供たち。「死なせたくない。お母さんはどうすればよいの。教えて」身も心も引き裂かれるように苦しいがどうしようもない。

山中への逃避行

私たち母子を守るために、以前私の家で働いていた、劉魁林と弟の魁文の二人が行動を共にした。その他食料を運ぶ人、外部との連絡をする人など当時五、六人の人たちが動いているようだった。

谷から谷を渡り平地を見つけて小屋を作り、地面に薄い布団を敷いて母子四人抱き合って眠る。朝目覚める布団を通して体が濡れていて体温で乾くまでかなりの時間がかかる。

食料は、外部から届けられる粟を谷川の流れ水で洗い、周りにある小枝を拾い集めて炊く。かつてはまづいと思つた粟飯で飢えをしのいだ。

山に入つてしばらくしてから野宿場所をしきりに移動し、やがて奥深いジャングルに入り、夜になると虎や狼が出没するので、夜通し焚き火は絶やせなくなつた。後で知つたが、私が満州人と逃げた非国民として開拓団幹部が私を銃殺して子供たちを連行せよとのことで、何人かの人たちが追跡しているとの噂が広まり、満州人の中にも、日本人の女が金とピストルを持って山に隠れているそうだから、金を奪つてこようとのことで思いがけなく、日本と満州の両国の人間に追われる身になった。本人の私には知らされず、彼らに大変な苦勞をかけたことに申し訳ないとの思いと、かつての仲間である団員から銃殺されようとしたことを知り悲しかった。

九月も半ば過ぎ、助けた人たちは言うまでもなく、私たち母子も疲勞の限界に追い詰められていた。朝夕の冷えこみも厳しくなつてきたある日、久しぶりに陽

光を浴びさわやかさを感じ、母子で小屋の周囲を歩いてた。突然近くで銃声が聞こえバラバラと五人の満州人が小屋の前に現れた。今度こそ最後のときと覚悟した私は、子供たちを身近に寄せて死を待った。

母子が座っている前にその人たちは、劉魁林と何か話しているが、私たちには分からない。殺すなら早くと思ひながら彼らの様子を見ると、なぜか態度が変わつてきた。しばらくすると、親方らしい怖い顔をした銃を肩に担いだ男がやつてきて、皆を連れて帰つていった。

後日聞かされた話では、五人の中に終戦前私の家に入入りしていた王連生ワンレンションという若者がいて、私の顔を見て驚きこの人は殺せない、助けてくれと懸命に懇願したとのことであつた。いったんは帰つて行つたが、また心変わりする恐れもあるとのことで、山から降りることになり、近くの万頭項子マントウキョウシの村に住む劉の親戚で呉家の小母さんと二人の息子の嫁さんが、私の変装用の長衣と布靴を届けてくれた。すべての持ち物を捨てて身軽になり谷を登り詰めた所で水田一枚ぐらゐの平地

にでた。

刘兄弟は外部との連絡に行き、逃避以来初めて母子四人だけになった。私は肌身はなさず体に巻いて持っていた日の丸を焼いた。立ち昇る煙を眺め思わず君が代が口をついてでた。日本人としての私は死んだ。これからは満州人となり、三人の子と共にこの地で生きるであろうか？九歳の長男も七歳の長女も泣いた。母子四人ただただ泣いた。長かった山中の生活子供たちはどんなにか苦しかったであろうに、手足を蚊に刺され手当てもできず、化膿しても泣きもせず黙って歩いた山道、この子たちが私をここまで生きさせてくれたのだ。彼らの姿にどんなに励まされたことか、有り難うね、心の中で叫び泣いた。午後の陽も西に傾きかけた寂しい一刻であった。

やがて刘の兄弟と呉家の小母さんがきた。彼女も私に同行すること。呉小母、刘兄弟と私たち母子四人合計七人の旅立ちである。なるべく人通りのない農道を歩く。たまに行き会う人も満州人が三人もいるので、特に近寄って確かめる人もいない。一晩ひたすら

歩き続けた。遠く遙かに山河屯の街が朝もやに霞んでみえる。大平村の近くを歩いていると、土煙を上げ馬で駆けてくる人が見えた。その人が私たちの近くまでくるといきなりサッと馬から降りて刘魁林に何か話をしてる。恐る恐る背後を通り抜けようとして驚いた。よく家にきていた梁海貴であった。立ち止まったまま言葉もでない私に彼は「北崎太太（奥さん）」体を大切にしていって行きなさい。無事を祈ります。悪い人がぐるから隠れなさい」と言って馬に飛び乗り駆け去った。「梁さん有り難う」とつぶやいたとき、呉小母さんにいきなり道端の高梁畑へ引きずり込まれた。農道から五メートルほど入った敵の溝に座らされたたん、疾風のように七、八人の馬に乗った人たちが駆け抜けて行った。

山河屯から哈爾濱へ

様々な苦しみを経てようやく山河屯街に到着。列車で哈爾濱へと向かう車内の座席は全部取り除けられており、板の上に座らされた。刘兄弟と呉小母さんが私たち母子を囲むような形で座り、満州人に触れないよ

うに気を遣っているのが分かった。

そのうち、車内に日本人の女性がいるのが分かり、ソ連兵に途中下車を命じられ、幼児を背負った若い女性が私の前を通って行った。つらかった。私は卑怯な人間だ。恥ずかしい。思わず涙のにじむ目で彼女を見上げたとき、呉小母さんが私の太股を軽くつねった。あふれるような人の涙。ソ連兵の暴虐、哈爾濱の街は異常な状況であった。

ようやく落ち着いた宿は雑居部屋。うっかり足も伸ばせないほどにひしめいている人々、ようやく寝静まった夜更け、呉小母さんに揺り起こされ前髪を切られ、リュハイという髪形にされた。翌日から、いつ乗れるとも分からぬ列車を諦めて劉の姉の住む安達県まで歩き続けた。旅の苦しみは例えようもなく、言葉にも表せないほどであった。

呉小母は疲れた様子も見せず絶えず私を励ましてくれた。心の中でいつも（小母さん有り難う）とつぶやきながら懸命に彼女の後について歩いた。

瀋江省青岡県中和鎮での一年

劉兄弟の姉、劉淑貞の婚家の姜家に身を寄せた私を、呉小母は、「この女は元満州国の警察官の妻だったが、夫は敗戦後殺された。三人の子を抱えて苦しんでいたが、病気になる幸い命は助かったが、耳が不自由になり生活に困るようになった。心の良い人なので助けて逃げてきた。しばらく、ほとぼりのさめるまで預かってほしい」と頼んだらしい。姜家は、農民から買った小麦を粉にして売る店を経営し、三人の使用人もいたが特に私を怪しむ様子もなく、昼夜同じ部屋で過ごした。

十日余り経ち、なんとか大丈夫だろうと思っただらしく、劉魁林と呉小母は山河屯に帰っていった。数日後、少しでも自由に生活できるようにとの淑貞の好意で小さな家を借りて住み、冬を迎えるころは少し落ち着いたが、満州語の話せない私は耳が聞こえないふりをして暮らした。子供たちは満州語を話すようになり、長男は街の十字路でお菓子などを並べて売ったりした。

時に劉魁林が遠い山河屯から訪れ、日本人の状況を

知らせてくれた。夫が北満の二道河子で戦死したこと、弟がソ連に連行される途中で逃亡し、無事に帰ってきたこと、母が私のことを心配している噂話など知らされ、肉親恋しさに気持ちは滅入るばかり、つらく悲しい日々、生活を他人に依存して生きる身はただ苦しむだけであった。

去った日本人の後を追って

昭和二十一年の冬、日本人に引揚げの噂が耳に入った。山河屯に帰り、肉親や日本人と共に帰りたいと駄々っ子のように頼む私に、刘魁林も困り果て、すべての事実を淑貞に打ち明け協力を求めた。

「知らなかった、どんなにつらい毎日だったでしょうね」涙を流しながら彼女は協力を約束してくれたが、当時はまだ治安が悪く、果てしない広野で旅行者が所持品を奪われる事件が発生している時だった。ようやく機会を得て車も確保され、旅費も与えられ淑貞に安達県まで送られ列車に乗ることができた。言葉にならぬ感謝の思いは涙となり、実の姉との別れのように悲しくつらかった。五常県で列車を乗り換えたとき、す

で日本人は帰国してしまったことを知ったが、万一の希望を胸に山河屯に到着。

私の希望は無残に消えた。もう行ける所はかつての河北村の近くの土地しかない。打ちひしがれた寂しい思いでかつて住んだ隣村の新立屯へと向かった。私の帰ったことを知った村の人たちはすぐに住む部屋を準備し、食料、塩、味噌など運び、食事まで作って届けてくれた。思いがけない村人の温かい情けに接し、嬉しく涙が止まらなかった。その後も日本人の消息を聞いて悲しむ私を慰め励ましてくれた。

通るべくして作られた道を歩むように、すべてを運命と諦め、悲しみの中で勧められるままに、刘魁林との生活に身を置き、農婦となって生きた。

新中国の助産婦となる

一九四九（昭和二十四）年十月一日、中華人民共和国が成立された。そのころ、山河屯周辺の農村でも生き生きとした生活が営まれていた。様々な運動が実行される中で、婦人解放運動が展開された。新中国の次代を担う子供と、婦人の生命を守るスローガンのもと、

助産婦養成所の学習会が行われた。一九五〇年、五十二年と二回にわたり、私は知識分子として、この運動に参加、学習会に出席を求められた。

中国語も十分でない私がなぜか？と不信に思いながら参加した。最終日に行われた試験の結果、特等学習模範に選出され、政府公認の助産婦となった。参加者全員が拍手で迎えてくれた。日本人である私に対し、生きたる希望を与えてくれる配慮に感謝した。与えられた商品を持って村に帰ると多くの人たちが名譽だと言って喜んで迎えてくれた。母子四人の生命を守ってくれた満州人民の役に立つとの思いは喜びとなり、どんな極寒の深夜でも、体の具合の悪いときでも助産を断わったことは一度もなかった。

貧しくても毎日充実した生活であった。

十四年ぶりの祖国日本

昭和二十七年（一九五二）年中国紅十字会と日本の代表団（日本赤十字社、日本平和連絡会、日中友好協会）との会談の結果、在中日本人の帰国希望に対し万全の協力をする声明が発表された。

この協定により、二十八年三月から翌年までに三万五千人の人々が日本に帰国した。子供なりに、将来を考へるほどに成長した三人の子供たちは、日本への帰国を希望した。彼らの決意の固いのを知った私は、幼い二人の子を残してでも帰国すべきだと思いつながら、なお迷った。最後の決断をさせたのは、中国側の国際的な立場に立った説得であった。

祖国への懐かしさ、肉親との再会、不安と期待の複雑な心境で舞鶴に上陸した。

日本語の話せない三人の子供たちの苦しみ、生活苦、残してきた子への愛情に泣き、身もたえするのが続き、病弱になってしまった不甲斐なさを嘆きながら、このどん底から這い上がるためには死んではならないとの思いながら、自分を生かす道は、日中友好運動以外にないと考へるようになった。

あれから既に四十三年が過ぎた。その間日中友好運動、戦争反対、平和を求める活動の中に生きてきた。そうして私が中国からの帰国者と関わりを持つようになってから三十年近くになる。自らの体験を通じ否応

なく言葉が分からなく苦しむ彼らへの思いが募り、わが子のように気になる、幼いときから異国に残され生長し、日本人であっても生活習慣、考え方が違うのは当然なことであり、彼らの苦勞は大変である。

戦争によって多くの人が犠牲となり命を失った。九死に一生を得た人たちもその後、歩んだ道は思いがけない悲しく、つらい例えようのない苦しい道なのであった。他人にはとうてい理解はできないであろうが、同じ苦難を経験した人間こそが命ある限り、一人でも多くの人々に訴えるべきであろうと思う。特に次代を背負う若い人たちに歴史の真実を伝え、どのような理由があろうとも多くの国民を犠牲にする戦争だけは、絶対に許すべきでないとの思いが、老いた私の胸を突き上げてくる。

【執筆者の横顔】

北崎可代さんは昭和十年十九歳で結婚、十一年に長男、十四年に長女を出産、その年御主人と共に四人家族で渡満され、北満の開拓団加賀村に移住された。極

寒の地で二人の幼子を抱えながら、慣れない農作業に従事しておられたが、農地が少ないのでそこから遠く離れた静岡村に移転。草葺の粗末な家で野宿同然の生活をしながら、次第に仕事にも慣れ家畜も飼育するようになり、満州人も雇うようになられた。そのうち三人目の子供もでき、やや生活も落ち着かれたのである。ところが、昭和二十年五月突然御主人に召集令状が届き、北満の寒い厳しい開拓村に可代さんと三人の愛児を残し、入隊された。御主人にしても可代さんにしても、どんなに悲しく寂しく、また心細い思いだったことでしょう。

可代さんは五十一年経った現在も、そのときの悲しみは忘れられないと言っておられますが、さもあらんと思いません。加うるに御主人が出征された五日後に三男の坊やに死なれ、二重の悲しみをいやす間もなく、八月十五日の終戦を迎えられたのである。翌日引揚げの逃避行に出発することになったが、顔見知りの満州人に、今ここを離れるとソ連兵に子供を皆殺しにされ、女性も連行されるから絶対に離れてはならぬと説得さ

れたが、開拓団の人たちと行動を共にしなくては非国民となる。身も心も苦しい思いの可代さんを、以前働いていた刘兄弟が連れて山中の逃避行となった。様々な苦勞をしてやっと着いたハルピンは異常な状態で、刘の姉の住む青岡県に生き、そこで一年間暮らしたが、御主人の戦死もそこで知らされた。

二十一年の冬、日本人引揚げの噂を聞き、日本に帰ろうと、もと住んでいた山河屯に出たが、そこには日本人は一人もいなかった。すべてを運命と諦め、悲しみの中で勤められるままに刘魁林と共に生活をし、農婦として生き延びられたのである。

昭和二十四年、中華人民共和国の成立後、可代さんは母子四人の生命を守ってくれた中国人民のため、少しでも役立ちたいと助産婦になられ、どんなときでも勤めに励まれた。

昭和二十七年日中国交会談の結果、帰国が許されることになった。刘魁林との間にできた二人の子を残しての帰国には迷われたが、中国側の説得と祖国への懐かしさ、肉親との再会を思い複雑な気持ちながら、帰

国を決意された。

帰国したものの、世間の風当たりの強さ、三人の子の言葉の苦しみ、生活苦、残してきた二人の子供の愛情に泣き、嘆く生活から自分を生かす道は、日中友好運動以外にないと考え、石川県日中友好協会の理事として働いておられる。中国から帰国する孤児、一時帰国者、来日する中国人のお世話役として現在、活躍していただいています。また若い人たちに、戦争で苦難を体験した一人として、戦争だけは絶対に許すべきでない、高齢の今も訴えておられる可代さんである。

(石川県引揚者更生同盟)

会長 久木 孝作)